粕谷。６月桑の実が熟して美味しいですが、**ヒメコウゾ**も熟しています。桑の実は黒く熟した実が甘くて美味しいですが、こちらは赤くなった実が食べごろです。この写真の上に「巻かれた葉」が写っています。これはオトシブミが作った揺籃です。オトシブミのメスは産卵の際に木の葉を円筒形に丸めていき葉を中ほどまで丸めた時に葉の中に卵を産みます。

紅葉台 新聞

第１９３号
２０２５年
８月２日
発行人：関谷　孝

粕谷和夫の観察日記

林縁や道ばたに咲く山野草の**ホタルブクロ**（蛍袋）が目立つ季節になりました。下向きの釣り鐘形のかわいい花です。名前の由来は、諸説ありますが、花の咲く時期が蛍の舞う頃に重なり、子供たちが花の中に蛍を入れて遊んだという説が一般的です。私はこの花が咲くと毎年地元の５河川に自然発生するゲンジボタルの数のカウントを毎晩やっています。昨夜は湯殿川の上流から中流まで約５㎞の調査を電動自転車で行い 178 匹をカウントしました。辺りが暗くなる 19 時 30 分から開始して調査が終了して家にたどり着くのは 22 時を過ぎます。

暗い中でのホタルの点滅飛翔に生命の躍動を感じます。

梅雨時の晴れ間に熟してきた**ビワ**が目立つようになりました。ビワは冬に開花し、初夏に収穫期を迎えます。最近では民家に植えられたビワがその家の人に食べられず放任されているものが目立ちます。人の代わりにムクドリやヒヨドリが食べてくれますが、放任されているビワは無農薬で稔った果物で、すぐれた薬効もあり、もったいないですね。

磯（海辺）を暮らしの場としていた**イソヒヨドリ**は八王子のような内陸には「いない鳥」でしたが、32 年前の 1993 年に当地で初めて観察されました。その後観察情報が増加し 2009 年には営巣も初めて確認されました。当地で増加し続けた観察情報に考察を加えて取りまとめ、「都市鳥研究会の会報」に投稿したところ NHK の目にとまり、「“幸せを運ぶ青い鳥” 海辺のイソヒヨドリが東京・八王子に“大進出”のナゾ」のタイトルで「ダーウインが来た」で放映されたのが 2021 年 10 月 10 日でした。その後も八王子では営巣が増えつづけ、今年もあちこちで営巣しました。この写真は６月 16 日に横浜線片倉駅前のマンションの外付階段の裏側の隙間に営巣したイソヒヨドリがトカゲを咥えて巣の中の雛に餌として運んでいた一コマです。

久しぶりに小石川後楽園に行った。東京ドームの隣りにありながら、時がゆっくり流れるような雰囲気の庭園であった。日本庭園にはアオサギ、コサギ、カルガモ親子、カワセミ親子がいて、野鳥観察を堪能できた。この写真には **３羽のカワセミ（左２羽が親、右１羽が子供）**が写っているが、実際にはここにもう１羽の子供がいた。もう 1 羽の子供が現れた時にカメラの電池切れとなり、貴重な証拠写真を撮りそこなってしまいました。

昨日の小石川後楽園の続きです。カワセミの親子がいた池には**カルガモ親子**もいました。子供はかなり大きく成長していましたが、3 羽しかいませんでした。孵化直後は 10 羽以上いたと推定しますが、この大きさになるまでには子供達が天敵にやられてしまったのでしょうね。スイレン池にはヒツジグサと思われる白い花のスイレン咲いていて、そこに同じ**白いコサギ**が来ていました。コサギの足指の黄色にご注目下さい。

飯能市を流れる入間川の吾妻狭から飯能河原を歩きました。ウグイス、ホトトギスが鳴く河原の遊歩道は日影もあり、気持ち良かったです。川にはカワセミ、キセキレイも姿を見せてくれました。遊歩道に**コオニヤンマ**がいましたが、警戒心が強く近づくことができず、アップの写真を撮れませんでした。

６月 28 日、毎月第４土曜日はカワセミ会ジュニアクラブの野鳥観察会です。毎月のコースは浅川の八高線鉄橋から堤防を下流に向かい約 2 ㎞先の長沼橋までを折り返す約 4 ㎞ですが、この日は 30 度を超す猛暑のため約１㎞（往復２㎞）に短縮して実施しました。この日の観察ポイントは野鳥達の暑さ対策。スズメや**カルガモは日影に避難、**ヒヨドリやカラスは口を開けて体熱を放散していました。ジュニアクラブは環境省のこどもエコクラブに入会していて、活動の様子は以下の URL で見ることができます。

https://www.j-ecoclub.jp/ecoreport/detail.php?id=15068

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」の HP に公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。